

第2節 中半入遺跡における集落構造と周辺の古代集落

1 はじめに

第2次調査では古代における水田跡と竪穴住居跡群などが同時に調査されるなど、生業と集落の関係を知らる上で貴重な発見となっている。さらに、今回もっとも特徴的な遺構としては旧河川跡や溝跡があり、集落を縦横にめぐっている状況が予想されている。これらは当時の集落の立地や構造を知る上では貴重な成果となっている。

ここでは、今回の第2次調査における部分的な調査から類推できる集落の構造を復元し、また周辺の該期の集落と比較しつつ中半入遺跡の特質を析出したい。

2 中半入遺跡の集落構造

今回の調査では、東西300m×南北500mにも及ぶ範囲のうち、東西200mのトレンチ3箇所、南北100mのトレンチ2箇所のトレンチ調査をしたことになる。集落想定範囲のうち縦横に細長く調査した結果、前章までのように微高地と低地からなる集落の内容がある程度明らかになっている。発掘調査は水沢市埋蔵文化財センターによる調査（第3次調査）やセンターによる次年度以降の調査として継続されるため（第4次調査）、集落の全貌はこれらの調査結果をまけて検討すべきであるが、まとめもかねて敢えてここでその構造を復元している。

2-1 第2次調査の結果

平安時代に属する集落跡は今回の調査で初めて発見された。その内容は竪穴住居群を中心とする居住域と水田跡である生産域、鉄滓の出土や工房跡と考えられる竪穴状の遺構などから類推される工房域、それらを取り囲むような溝跡、旧河川などから構成される。

それぞれの遺構は特有の地形に立地している。竪穴住居跡や工房跡は旧河川に挟まれた微高地上に立地する。この微高地が遺跡の範囲内にいくつ存在するかは確認できないが、すくなくとも2次調査から判明することは大きく3箇所の微高地の存在が確認される。①A区西側（A1区）、②B区中央部からC区・D区西側にかけて、③D区東側付近の3箇所である。①においては平安時代の住居跡は確認できず、1次調査の成果からもこの付近に平安期の集落は確認できない。しかし、水田跡に望む立地からすると今後さらに北側に集落が存在する可能性がある。居住域であるか否かは別にしてもこの付近にもう1つの微高地が存在する。②はB区中央部で多数の住居跡が確認された区域である。旧河川の位置関係から見ると微高地の北端と南端付近を調査したことになる。B区西側と東側の低地（旧河川）に挟まれた微高地で北側に続くことが予想される。この微高地上に竪穴住居跡を中心とする遺構群が集中的に構築されている。C区については微高地上に属すると考えているが、遺構が発見されていない。これは削平によるものか、当初から存在していないのか明らかにできなかった。C区先端には遺構が存在すること、遺物の出土がほとんど認められなかったことなどから考えると、当初より遺構が存在しなかった可能性がある。なお、この竪穴住居跡群が存在する②の微高地西側の旧河道には溝跡（SD16）が作られている。ここからは多量の墨書土器をはじめ、完形に近い杯類や甕が出土している。とくに杯の内面には灯心の痕跡が認められるなどいわゆる「万灯会」が行われていた可能性がある。これらのいわば律令的な溝祭祀は集落の外れで行われることが多く、この溝跡の存在が、居住域の境界であることを示しているかもしれない。

③の微高地はD区の東端以東に広がると予想される微高地である。この微高地の西側にはD区の低地があり②の微高地と画されている。微高地の多くは2次調査の範囲外に延びているためその様相は不明であるがSI20やSI21の存在から居住域が広がっていることが推定される。この微高地上の様相については3次調査や4次調査の結果をまっぴらあためて検討したい。

次に、本遺跡の特徴である低地部分についてみていく。

低地(旧河道)は今回明確に確認されたのは4箇所であり、花粉分析や遺構のあり方からA区の東端付近にもう1箇所存在する可能性がある。

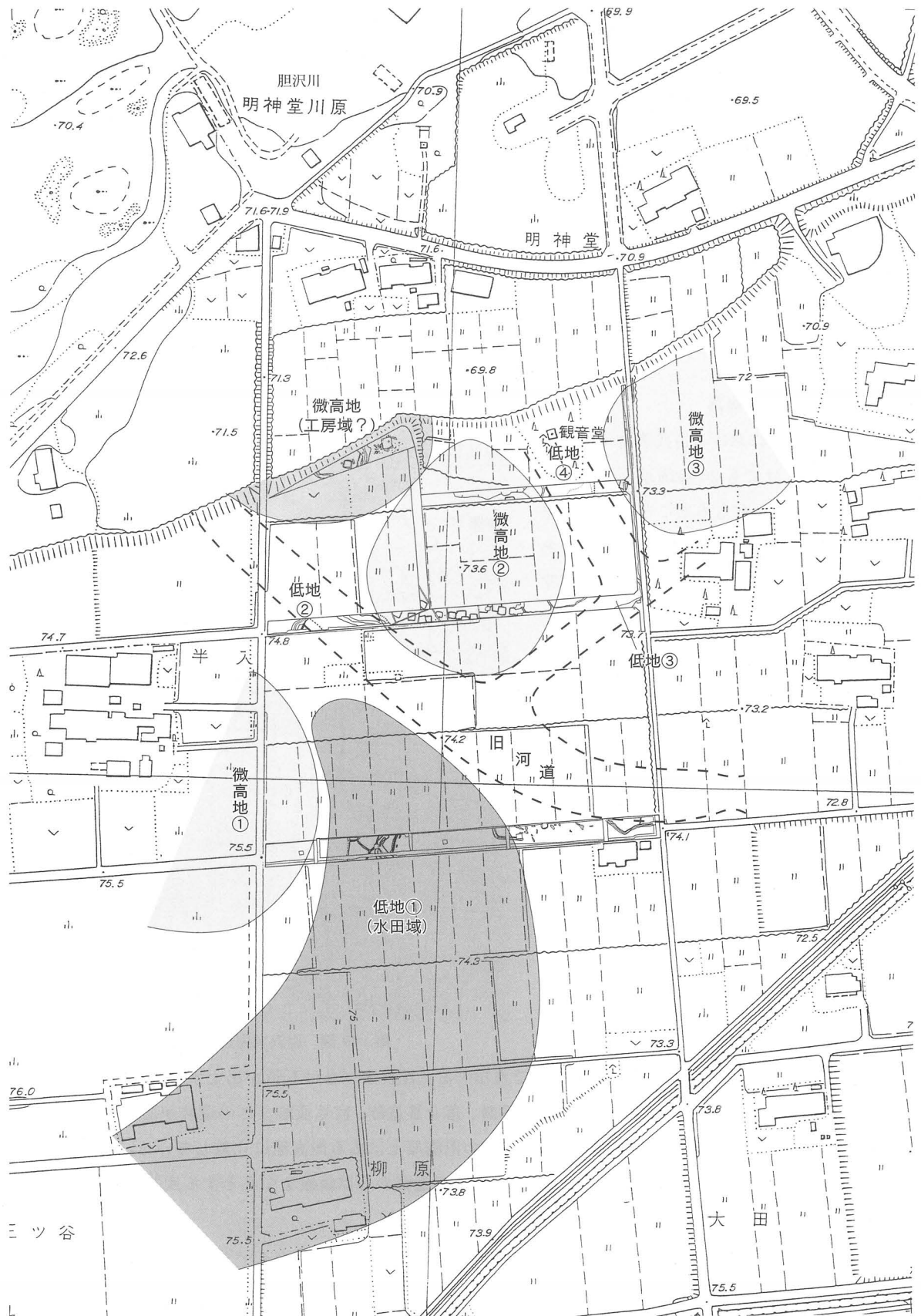
低地①はA区西側の水田跡が検出された区域を中心とする。この地点はⅧ層自体の落ち込みが確認できることから低地はⅧ層堆積時における河川や谷地形が成因であると考えられる。この低地は、水田に堆積した十和田の降下火山灰の広がりから見て、さらに南北に広がっていることが予想される。

低地②はB区西側、低地③はB区東側に存在する。これらもⅧ層自体の落ち込みがその成因と考えられ、堆積層から考えると旧河道であった可能性が高い。両者とも旧河道堆積層上に溝が構築されている。低地②の旧河道上にあった溝跡は調査区の度重なる水没と泥寧のためやむを得ず破壊してしまったが、東西方向に延びる溝が存在し、火山灰の入り方からみてSD16と同様の時期と考えられる。また、旧河道上面の堆積層からはプラント・オパールが検出され、畦畔や水路等の明確な遺構は発見できなかったが、水田跡が存在していた可能性が指摘できる。

低地④はD区東側に位置する。低地②・③と同様に旧河道上に溝が構築されていた。低地③と同様溝跡の上層にあった低地の堆積層からはイネのプラント・オパールが検出されている。

これらの低地は各微高地の周囲を巡るように位置しており、居住域を区画するようである。低地や②・③は旧河川跡と想定でき、かつ同一のものと仮定すると、第146図のように、いくつもの支流をしがえた河道が復元できる。低地①のような後背湿地状の場所に水田を、自然堤防上の微高地に住居を構築している状況である。なお、該期において、この旧河道が存在していたかどうかは明確ではないが、SD16や、SD14の状況から、すでにある程度埋没しており、湿地状を呈していたと思われる。この低地に共通することはいずれにおいても水田跡が検出されるか、その存在が予想されることである。溝跡が低地を利用して構築されていることも共通点としてあげられる。

このように微高地と低地にわけてみると、微高地が居住域、低地が水田を中心とする生産域として区分することが可能かもしれない。水田跡の検出は岩手県においては非常に稀であるため、この関係が一般的なあり方を示すかどうか不明であるが、平安期における集落の1類型として重要な関係であるといえよう。



第146図 景観の復元

2-2 景観の復元

これらの微高地と低地の位置関係をもとに、周辺の等高線、層序などを参考にして第2次調査における集落の構造を復元すると第146図ようになる。現状の平坦な水田地形からは想像ができないほど、当時の地形は複雑であったことがこの図をみれば明らかである。この微高地と低地から構成される集落が中半入遺跡の立地環境であり、大きな特徴となっている。

このような居住域(工房域)と生産域に大きく2分される集落構造は岩手県においては極めて稀な状況であり、今後の集落論を検討する上では貴重な成果となるであろう。

ここで検討した様相はあくまでも第2次調査の知見から導き出された結果であり、今後継続される調査の結果、見直しが迫られる可能性もある。今後の成果とも合わせてあらためて検討する必要がある。

3 周辺の古代集落

3-1 周辺の古代集落

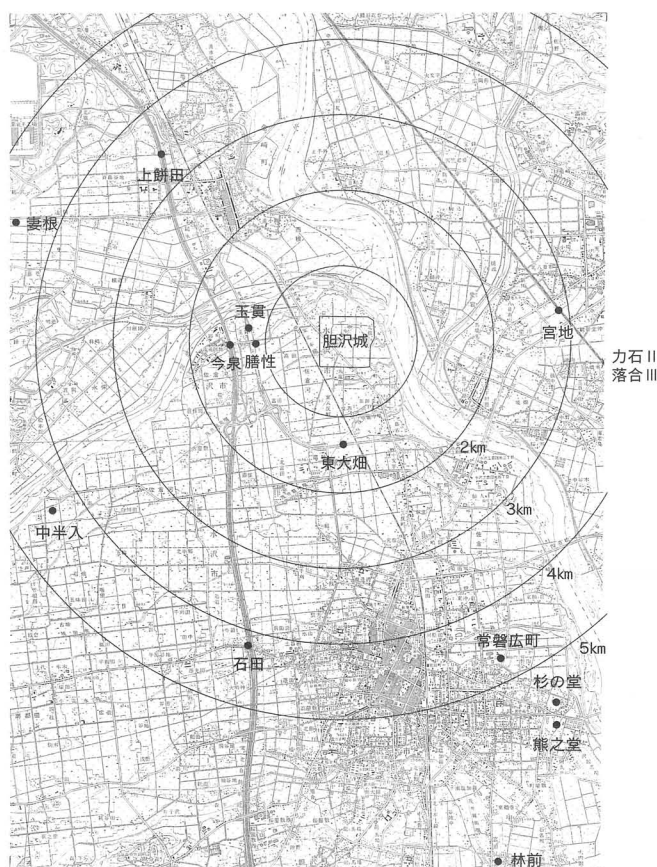
中半入遺跡周辺における古代遺跡は調査されている遺跡だけでも20遺跡以上確認されている。胆沢城の存在もあることなどから県内においても遺跡の密度の高い地域でもある。これらの集落の様相については伊藤博幸の研究に詳しい(伊藤1998)。ここではこれを参考にしつつ、おもな遺跡についてその特徴をみることにする。

中半入遺跡の周辺に存在する古代集落は、胆沢城を中心に捉えるとわかりやすい。(第147図)

胆沢城周辺では膳性遺跡、東大畑遺跡などの遺跡が水沢段丘上に立地している。胆沢城からの距離は1~2km以内である。膳性遺跡は胆沢城の西方に位置する。古墳時代後期から奈良・平安時代、中世まで続く遺跡であり利用するには好適な立地環境であると言える。東大畑遺跡は胆沢城の南に位置し、奈良時代と平安時代の集落が途中断絶時期を挟んで重複する。注目すべきは石帯が出土する点である。

胆沢城の東側、つまり北上川左岸では力石Ⅱ遺跡、落合Ⅲ遺跡、宮地遺跡などの遺跡がある。これらはいずれも北上川によって形成された沖積地にあり、その氾濫原上にある微高地に立地している。宮地遺跡からは鉸具等の帯金具が出土することや、力石Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡からは鉄鎌を中心とする武器類が豊富に出土するなど他とは異なったあり方を示す。

胆沢城の北側、胆沢川を挟んで北側には妻根遺跡、上餅田遺跡などがある。いずれも金ヶ崎段丘(低位段丘)上に立地する。妻根遺跡は9世紀初頭に新規に成立する集落であるが、掘立柱建物跡、井戸跡から構成され、伊藤がいう「計画村落」(伊藤1980)を端的に表している遺跡でもある。胆沢城からの距離は約4km



第147図 胆沢城周辺の古代集落

である。上餅田遺跡は奈良・平安時代の集落であるが、そのなかで9世紀代をみるとその前半に集落が存在するものの、あとには継続しないようである。胆沢城から約4km北に離れている。

中半入遺跡の所在する胆沢城の西側、胆沢川右岸には、石田遺跡、西大畑遺跡などがある。水沢段丘上に立地している。石田遺跡は8世紀から9世紀にかけての集落跡であり、特徴的な点は溝によって居住域が区画されることや掘立柱建物が配列をもって構成されることである。胆沢城から南に約4kmの地点に位置する。

このほか胆沢城の南には、林前遺跡、真城が丘遺跡、中林遺跡などがあり、胆沢城から南に5km以上の距離がある。

まとめると、立地は低位段丘である水沢段丘上に立地する例が多いが、中位段丘である胆沢段丘上に立地する例も若干ではあるが存在する。胆沢城を中心として考えるとその周囲にある程度の距離的なまとまりを持って各集落が存在するという特徴がある。

伊藤はこういった集落のうち9世紀代に成立した集落を計画村落と呼び、律令的色彩の濃い集落として、7・8世紀代から継続する自然集落として区別している。伊藤のいう計画村落とは考古学的に見て、新しい段丘へ進出することのほかに、村落構造が掘立柱建物、井戸跡、竪穴住居跡から構成され、また、区画溝、広場的な空間をもつということである（伊藤1980・1997）。

中半入遺跡の立地は水沢段丘上でありかつその縁辺部でもあるなど周辺の遺跡と同様の立地である。また胆沢城からの距離は約4kmであり、近接する集落の一つであると言える。

3-2 集落の消長関係からみた中半入遺跡の特徴

つぎに上述の集落の存続時期について少し考えてみたい。

消長についても伊藤は分類し検討を行っている（伊藤1998）。そのなかで9世紀以降についてみると、

I：奈良時代に継続していた集落が、一端途絶え、9世紀代に再び成立するもの。

II：8世紀代に形成された集落がそのまま9世紀代に継続するもの。

III：9世紀になって新規に成立するもの。9世紀前半に成立するものと9世紀中葉に成立するものに細分。

と3大別している。消長関係による集落の分類はその成立背景を考える上においては重要な属性となると考えられる。実際に伊藤はIIIの9世紀前半と9世紀中葉に成立する集落はそれぞれ、胆沢城のI・IIに対応して出現している可能性を考えている。

中半入遺跡の消長関係を考えるうえで、とくにその終末時期を重視してこれらの遺跡と対比したい。

I類に属する上餅田、今泉、膳性、東大畑、落合Ⅲ遺跡などは、9世紀代に再度成立するが、その存続期間はあまり長くない。再成立しても単発で終焉する集落がほとんどを占める。そのなかで、膳性遺跡は例外的である。古墳時代後期から奈良時代にまで継続し、9世紀中葉になり再び登場し、その後10世紀中葉まで継続していく。I類のなかではその継続期間も、終末時期についても特異な在り方である。ただ、時期のあり方をみると6・7世紀と9世紀代の集落ではその性格やあり方が異なっている可能性がある。その場合、9世紀以降の集落はⅢ類に含められるかもしれない。江刺市・落合Ⅲ遺跡も規模は小さいものの同様の在り方を示す。出土遺物をみると10世紀中葉にまで継続する。ただし、奈良時代集落の発見例が極端に少ないため、Ⅲ類に含まれるかもしれない。各遺跡の全ての範囲を調査しているわけではないものの、大まかな傾向は余り変化無いものと思われる。I類の特徴として多くは、単発におわり、10世紀にまで継続しないことが挙げられる。

II類には、石田、杉の堂坂口、熊之堂、力石Ⅱ、宮地遺跡などがある。9世紀代を通じて継続している遺

跡がほとんどである。終末時期は10世紀以降に継続するものとそうでない集落がある。前者には、宮地遺跡、力石Ⅱ遺跡などがある。しかし、10世紀に継続する遺跡においてもその前半代で終焉をむかえる。宮地、力石Ⅱ遺跡は非常に継続性の高い集落と言える。

Ⅲ類には金ヶ崎町・妻根、水沢市・林前、袖谷地、朴ノ木、江刺市・鴻ノ巣館などの遺跡がある。9世紀前半に成立する集落には妻根、林前遺跡などがある。9世紀中葉以降に成立する集落には、

袖谷地、朴ノ木、鴻ノ巣館遺跡などがある。9世紀前半に成立した集落は非常に短期間で終焉するものが多い傾向がある。9世紀後半に成立する集落は継続性は短いものの、10世紀前半、なかには中葉にまで存続するものも多く認められる。先に分類した杯D3・E3類は、袖谷地、鴻ノ巣館遺跡などから出土していることから、これらの遺跡は10世紀中葉にまで存続すると考えられる。また、落合Ⅲ遺跡はこのⅢ類に含めて考えると、これら袖谷地、鴻ノ巣館遺跡と同様の位置づけができる。

このように集落の消長関係をみると10世紀以降に集落を存続するのは8世紀中葉以降から継続する集落と、9世紀以降に新規に成立する集落の2グループであることがわかる。ただし、10世紀前半で途絶える集落が多く10世紀中葉以降に継続する集落はこれらのなかでもきわめて稀な存在となる。とくに力石Ⅱ遺跡や宮地遺跡などは長期にわたる継続性が確認でき、10世紀にまで継続する数少ない集落となっている。北上川左岸域における該期の拠点的な集落と考えられる。

このような特徴をもつ周辺の集落と対比して、中半入遺跡をみると、部分的な調査であり、調査がまだ継続されていることから確かなことは言えないが、9世紀代を通じて集落が継続しかつ10世紀中葉にまで存続している可能性が指摘できる。また、1次調査においては7・8世紀代の集落も発見されるなど、その存続期間が奈良時代にまで遡ることが確認できる。もちろん、中半入遺跡は古墳時代前期から、6世紀代に断絶が認められるものの7世紀～8世紀前半まで継続的に集落が続いていることが1次調査において確認されている（高木2000）。このように長期間にわたる集落というのはこれまでのところ確認されていない。先の分類に当てはまると、Ⅰ類がもっとも近いかもしれない。とくに膳性遺跡とは出現の時期こそ異なるものの、その終焉の時期や継続期間などは非常に近いものがある。

また、もう一つの見方として、先に触れたように6世紀代や8世紀後半代の断絶を最大限に認められれば、古墳時代～奈良時代の集落と平安時代の集落とを区別することができ、後者をあらためてⅢ類に位置づけることも可能かもしれない。そのような考え方ができるならば、10世紀中葉まで継続する集落は、同じような継続性、終焉の時期などの特徴をもつ集落群として捉えられる。

いずれにせよ、本遺跡は長い継続性をもち、かつその終焉の時期が10世紀中葉という時期にまで存続す

	9 世 紀			10 世 紀		
	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉
膳性遺跡						
東大畑遺跡						
林前遺跡						
中林遺跡						
杉の堂坂口						
袖谷地遺跡						
力石Ⅱ遺跡						
宮地遺跡						
落合Ⅲ遺跡						
兎Ⅱ遺跡						
朴ノ木遺跡						
鴻の巣館遺跡						

*伊藤（1994）を基に作成

第148図 集落の消長

ることが大きな特徴としてあげられるのである。このような遺跡は、膳性遺跡や宮地遺跡、力石Ⅱ遺跡などが類似する遺跡としてあげられる。終焉の時期でもある10世紀中葉というのは胆沢城Ⅲ期と同様の時期であり、あるいは胆沢城の終焉と軌を一にしているのかもしれない。

3-3 小結

中半入遺跡と周辺の古代集落との対比を試みた結果、本遺跡は、長期にわたる継続性、とくに10世紀中葉にまで存続するという特徴が認められた。これらの特徴は、宮地遺跡、力石Ⅱ遺跡等と同様の特徴である。これらの遺跡はまた、石帯や鉸具という律令的な色彩の強い遺物を出土するなど胆沢城との強い結びつきが考えられている（伊藤 1980・1997）。

この点で考えると中半入遺跡は、墨書土器、初期貿易陶磁、緑釉陶器、溝祭祀が確認されるなど、遺物の種類は異なるものの力石Ⅱ遺跡や宮地遺跡と同様か、あるいはそれ以上に非常に律令的色彩の強い遺物を出土している。

また、消長時期についても、調査が継続していることから正確ではないが、すくなくとも胆沢城とその終焉の時期は類似している。

このように、集落の消長時期に注目して本遺跡の特徴を考えてきたが、中半入遺跡は非常に律令的色彩が強く、胆沢城との強い結びつきが想定できる。

4 まとめ

以上、中半入遺跡2次調査の結果から類推される集落の構造考えた上で、周辺の遺跡と対比し、とくにその終末の時期に重点を置いて比較してみた。その結果、本遺跡は胆沢城との強い関連が想定できた。

この集落の消長時期に関する検討は、各遺跡において調査がすべての範囲において行われたわけではなくその一部を調査した結果に基づいて検討を加えている。したがって、今後調査が広げられれば新たな知見が加えられるし、本遺跡については調査がまだ継続されている（第4次調査）ため、細かな点においては変更もあると考えられる。ここで検討した項目はあくまでも現時点に中間報告の性格が強いものであることを最後に付記しておく。